

地域と共に生きる医療  
求められる新しい姿とは

三朝温泉病院  
院長 森尾 泰夫



森尾 泰夫 もりお やすお

整形外科医。1980年鳥取大学医学部卒業、84年同大学院医学研究科博士課程修了。同医学部附属病院及び国立三朝温泉病院勤務などを経て、92年には米国ハーバード大学へ留学(マサチューセッツ総合病院整形外科リサーチフェロー)。2003年鳥取県中部医師会立三朝温泉病院院長心得、04年より現職。診察時は患者とのやりとりを大切にしている。趣味は読書。お風呂に浸かりながら読むこともあるほどの本好き。

原点を見つめ直し、地域医療の中心的存在になれるよう努めたいですね。

——新しい年が明けました。三朝温泉病院にとって今年はどうな一年になりそうですか。昨年の実績を踏まえつつ抱負をお聞かせください。

**森尾** 昨年は、4月に「診療報酬改定」と「消費税アップ」という大きな変動がありました。加えて医師の異動やご開業などが重なり、入院患者数や医業収入は全体的に減少しました。ですが、秋口からは少しずつ上向いており、あまり心配はしていません。

そんな中で改めて大切だと感じるのは、当院の「原点」である「内科」「整形外科」「リハビリテーション」の医療です。我々の専門であるこの分野をいかに充実させていくか。三朝町はもちろん、湯梨浜町、倉吉

市といった県中部に暮らす高齢者の方々を中心に、地域の診療所・介護福祉施設とも密な連携を図りながら、当院の存在意義をしっかりと示せる新年にしていきたいですね。

7月には、日本医療機能評価機構の「病院機能評価」を受審しました。2004年に認定病院となり、今回は3回目の審査です。大きな問題点はなく、10月には無事「合格」の通知を頂きました。スタッフの尽力に感謝しています。

三朝温泉温泉病院の機能は十分に水準を満たしているのか、我々は時々振り返る必要があります。こうして第三者の目で見いただいた結果を謙虚に受け取り、直すべきところは直し、足りないところはきちんと補っていく。この繰り返しが非常に大事なんですね。今年も真摯に病院づくりに努めていきたいと思っています。

## 退院後の在宅療養を支える 「訪問看護」がスタートします。

—— 新たな取り組みとして、今年3月に「訪問看護ステーション」が開設されるそうですね。その目的は？

**森尾** 医療政策上、長期入院が困難な時代となってきました。患者さんは、不安を感じながらも退院を余儀なくされます。そういう患者さんやご家族が安心して自宅療養できるよう支援することを目指しています。まずは当院に入院されていた方を対象に、そして徐々に地域の診療所にかかっておられる患者さんにも広がっていきたいと考えています。

退院してまもなくは病態がまだ安定していませんから、特に夜が不安なんですね。ですから当院の訪問看護は、<sup>\*</sup>24時間体制を整えました。休日や夜間で医師に診てもらえないときなどに利用できればきっと心強いはず。それに、診療所の医師の負担も軽減されるんです。

これまでの経験上、訪問看護のニーズはあると確信していますし、これは当院が地域医療に貢献していく上で欠かせない事業となるはずですよ。

—— 具体的にはどういった看護を提供されるのですか。

**森尾** 病状の観察、血圧・血糖値等の測定、床ずれのケア、療養・介護方法のアドバイス、ご家族の支援などですね。訪問看護の結果、「診療の必要がある」と判断すれば、すぐにかかりつけ医に依頼。リハビリの必要があればPT(理学療法士)やOT(作業療法士)も出かけていきます。専門スタッフによる「訪問リハビリテーション」ができるのも当院の強みです。



※ 開設時は365日24時間電話の連絡体制とします。

専門研修に出かけたり機材を整えたりと、昨年頃から着々と準備を進めてきました。また看護師は、「ぜひ訪問看護をやりたい」と自ら手を挙げた意識の高いメンバーですから、私自身とても期待しています。

## 「温泉+現代医療」の特性を生かし、 地域の期待に精いっぱい応えたい。

—— 国の施策として「地域包括ケアシステムの構築」が打ち出されています。その中で三朝温泉病院が担う役割とはどのようなものですか。

**森尾** 「地域包括ケアシステム」は、年を取っても住み慣れた地域で暮らし続けられるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援を地域の中で一体的に提供していこうというものです。当院は其中で、手術などの急性期治療が終わり、機能の改善を目指す患者さんにリハビリや適切な療養環境を提供していく「回復期医療機関」としての役割が期待されています。現在「地域包括ケア病床」として14床を確保し、回復期リハビリテーション病床60床と合わせ、急性期病院からの患者さんを受け入れています。

—— つまり、地域の病院が特性に応じて役割を分担し、患者さんは病状に適した専門病院で診てもらえる、ということなんですね。

**森尾** そうなんです。昔は手術した病院が退院まで患者さんを診ていましたが、今は違います。例えば脳卒中の場合、救急病院で手術を受けたら、病状が安定するまでそちらに入院します。その後リハビリができる状態にまで回復したら当院のような回復期の病院に転院し、日常生活に戻れるよう専門的なりハビリテーションを受ける。退院して自宅療養される場合は訪問看護で引き続きサポートし、慢性期の病院や介護施設に入られる場合はそちらとの連携を図っていくという仕組みになっています。

—— そうした地域医療の中で“三朝温泉病院らしさ”として意識して取り組んでいることはありますか？

**森尾** 「ラジウム塩化物泉」という特徴ある自家源泉を有していることは、他病院にはない利点です。しかし温泉だけで病気が治るわけではなく、そこに適切な診断や薬、温泉を活用したリハビリといった「現代医療」がプラスされてこそなんですね。だから我々は、常に全国水準の医療を追い求めていく必要がある。この時代に「田舎だからできない」はないと思うんです。スタッフみんなで力を合わせて研鑽を積み、いつかどこかでは一んとブレイクしたいですね(笑)。